

令和 7 年 5 月 25 日現在

機関番号：14401

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2020～2024

課題番号：20K20698

研究課題名（和文）過去の速記原本を可読化するための日本語速記史の研究

研究課題名（英文）A Study of Japanese Shorthand History to Enhance the Readability of Historical Shorthand Records

研究代表者

岡島 昭浩（OKAJIMA, Akihiro）

大阪大学・大学院人文学研究科（人文学専攻、芸術学専攻、日本学専攻）・教授

研究者番号：50194345

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、速記者本人によって通常の日本語表記への復文がなされず速記符号で書かれたままで残されている資料を、速記者本人以外によって解読するための準備研究というものであった。困難を当研究によって少しでも埋めることが目標であり、速記史・速記符号史を、残された速記符号を解読するという視点から構築し直すこと、多くの速記者たちがどの速記方式により、どのような工夫を凝らして速記してきたのか、ということが明らかになるようにする、などを目指したものであった。

研究協力者たちの論考・資料を多く載せた報告書を三冊刊行し、インターネット上に掲載した資料・データも、多いものになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本来、速記は人の語ったものを速記符号で書き取った後、通常の日本語表記に改めたところまでで完成するものだが、何らかの事情で速記符号のまま残された資料がある。通常、速記符号を通常の日本語表記に改める作業は、速記者本人によってなされるのが普通であるが、過去において速記がなされた資料は、速記した本人ではなく、後世の人によって解読することが必要である。

そうした解読には困難が伴うが、解読を行うことにより、埋もれていた情報が陽の目を見ることになるし、また、通常の日本語表記では表に現れない語形情報などが読み取れるなど、速記原本を解読する行為の意義は大きい。速記者たちの情報を整理しておく意義もある。

研究成果の概要（英文）：This study served as a preparatory investigation for deciphering materials written in shorthand symbols that were never transcribed back into standard Japanese by the original stenographers. The aim was to bridge, even slightly, the gap created by this difficulty. To that end, the study sought to reconstruct the history of Japanese shorthand and its systems from the perspective of decoding remaining shorthand texts. It also aimed to clarify which shorthand methods were employed by various stenographers and what specific innovations they used in their note-taking.

As part of the project, three volumes of reports containing numerous essays and materials by research collaborators were published. A substantial amount of related materials and data were also made available online.

研究分野：日本語学

キーワード：速記 速記符号 語形

## 様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

従来、速記原本の解読は、速記を行った当人によってのみ行われることであった。速記原本を目にしても、どの速記方式によるかの認定法などは考えられてこなかった。それを認定する方法を確立し、解読に繋げようというのが本研究である。

歴史的価値のある速記原本が存在しても、速記から年月が経過し、さらに速記者当人が亡くなると解読は困難となるが、不可能ではないことが示せれば、貴重な資料である速記原本の死蔵・廃棄を抑止する効果がある。

また、速記原本や速記教本類を系統的に収集整理することは、いわば速記の口ゼツタストーンを残すことになるものであり、しかも、それ自体に解読の鍵を含ませたものともなるのである。

### 2. 研究の目的

速記資料は通常の表記に改められたものを指すが、速記用の符号で書かれた速記原本が存在し、そこには「整文」などの作業で失われる情報も残されている。通常は、「反訳」と呼ばれる、符号から通常の表記への書き換えは、速記者自身によってなされるので、速記者当人によらない解読は容易ではない。しかし、速記者が亡くなるなどしたものの場合には、速記者以外による解読の必要が生じる。速記は、さまざまな速記方式によってなされるので、その速記方式を判定する必要があるし、同じ方式による場合でも、団体や個人によるカスタマイズもあり、解読に至るには手順を踏む必要があるが、その手順は、現在は手探りの状態である。本研究では、速記原本の解読に向けて、残された速記符号から速記方式を判定し解読に至るために、原本判読のための日本語速記史の研究を行うものであり、この研究により、速記原本は、日本語史研究資料として、価値を高めることになる。

### 3. 研究の方法

本研究は、過去の速記原本を、解読するために行うもので、さまざまな速記法、ならびにその改良・運用の歴史の研究、さらには、その識別法の研究(速記符号がどの方式に依っているのかを識別する)、解読法の研究である。速記者が音声言語を書き取るに際して、すべての音に平等に向き合っているのではないことは、既に明らかであるが、その効率化の方式は、数多く開発されてきた速記法によって異なり、更に、その速記法を改良して使うことは、団体ごとに、また個人においても行われてきた。

速記法が多数存在し、また効率化のあり方が様々であるために、速記原本が存在しても、解読するには、どの速記法によっているのかを判断せねばならない(速記者が誰であるのかが分かることにより、どの速記法によるのかが分かることもあるが、一人の速記者が速記法をカスタマイズしたり改良したり、また速記法を乗り換えたり、あるいは自身で開発することもある)、速記法が判明しても、すべてが解読可能になるわけではない。団体や個人によるカスタマイズのバリエーションを収集し、そのバリエーションのありようを記述し、個々の速記原本に当たった時の解読に具えておくことである。

本研究は、研究協力者として、日本速記協会の速記士らの参加を得て、具体性を以て研究を進める。日本教職員組合に残っている速記原本を解読した経験から、その方法を具体的に記述し、また解読に当たって壁となったもの、これから解読してゆく際に壁となることが予想されるもの、またその壁を乗り越えるためにどのような研究が必要かについて研究する。

速記改良の歴史の研究も行うが、速記方式の改良がどのように行われたのかを具体的に見て、そのありようを解読に生かすための方針を探る研究である。字音語尾音の規則性と縮記法、省略法への応用を研究し、速記の効率化のために簡略化される字音の省略法のさまざまに多様化・多型化した実態を示して、解読のための資料となることを目指す。速記行為における類音語の間違ひに対応するために、日本語における類音語シソーラスの構築を目指す研究も行う。整文についての研究の実績に基づき、速記録作成における整文の目的とその理論についての研究を行う。速記原本の解読がどこまでの文字化を目指すのか、という研究に繋がる。

速記者が数を減らし、その養成機関や、大学等における研究会も減少している。そのような人々のカスタマイズの証言を書き留めて分析することも行う。

### 4. 研究成果

本研究は、速記者当人によって通常の日本語表記への復文がなされず速記符号で書かれたままで残されている資料を、速記者当人以外によって解読するための準備研究というものであった。困難を当研究によって少しでも埋めることが目標であり、速記史・速記符号史を、残された速記符号を解読するという視点から構築し直すこと、多くの速記者たちがどの速記方式により、どのような工夫を凝らして速記してきたのか、ということが明らかになるようにする、などを目

指したものであった。

研究協力者たちの論考・資料を多く載せた報告書を三冊刊行し、インターネット上に掲載した資料・データも、多いものになった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 岡島昭浩	4. 巻 近代編
2. 論文標題 近代語資料としての『史談会速記録』	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 コーパスによる日本語史研究	6. 最初と最後の頁 257-274
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 1件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 岡島昭浩
2. 発表標題 国語史料としての速記録 速記の実態に即して
3. 学会等名 九州大学国語国文学会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 岡島昭浩
2. 発表標題 索引や語集の集成について 『国語語彙史の研究』語彙累積索引の作成を契機として
3. 学会等名 国語語彙史研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岡島昭浩
2. 発表標題 辞書等の項目データベース作成の試行について：ルで始まる項目を例に
3. 学会等名 近代語学会
4. 発表年 2021年

## 〔図書〕 計4件

1. 著者名 岡島昭浩編	4. 発行年 2024年
2. 出版社 私家版	5. 総ページ数 93
3. 書名 過去の速記原本を可読化するための日本語速記史の研究 2022-2023年度報告書	

1. 著者名 岡島昭浩編	4. 発行年 2022年
2. 出版社 私家版	5. 総ページ数 341
3. 書名 過去の速記原本を可読化するための日本語速記史の研究 2021年度報告書	

1. 著者名 岡島昭浩編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 私家版	5. 総ページ数 105
3. 書名 過去の速記原本を可読化するための日本語速記史の研究 2020年度報告書	

## 〔産業財産権〕

## 〔その他〕

国語史のページ <a href="http://uwazura.perma.jp/wiki/">http://uwazura.perma.jp/wiki/</a> 速記科研 <a href="http://uwazura.perma.jp/sokki/">http://uwazura.perma.jp/sokki/</a>
---

## 6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	兼子 次生  (Kaneko Tsuguo)		
研究協力者	小谷 征勝  (Kotani Masakatsu)		
研究協力者	菅原 登  (Sugawara Noboru)		
研究協力者	山崎 恵喜  (Yamazaki Keiki)		
研究協力者	アルベケル アンドラーシ  (Albeker Andras Zsigmond)		
研究協力者	荒木 章  (Araki Akira)		
研究協力者	桑原 みなみ  (Kuwabara Minami)		
研究協力者	三牧 勉  (Mimaki Tsutomu)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	真下 厚  (Mashiko Atsushi)		
研究協力者	河野 光将  (Kono Mitsumasa)		
研究協力者	市地 英  (Ichiji Ei)		
研究協力者	伊藤 智弘  (Ito Tomohiro)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関